

(課程博士・様式9)

愛知教育大学・静岡大学大学院教育学研究科

学位論文審査報告書

審査委員

審査委員長 村越真
委員 古田有司
委員 野地恒有
委員 石川恭
委員 稲葉みどり
委員 _____
委員 _____

審査期間 令和元年11月22日から令和2年1月23日

審査論文

発達障害幼児の音韻意識及び語彙の獲得を目的とした言語指導プログラムの
開発に関する研究

専攻 共同教科開発学専攻
氏名 大島 光代
生年月日 昭和33年4月30日
提出日 令和元年11月15日

この研究は、発達性読み書き障害等の困難をかかえる子どもの「読み」の力の基礎となる「音韻意識」、「語彙」、「文字認知」の力の向上を目指した独自の言語指導プログラムの開発、その効果の検証、障害幼児の効果的な指導・支援方法のアプローチカリキュラムの提案という3つの柱から構成されている。

プログラムの開発においては、先ず、これらの障害をもつ子どもの言語指導の実践と教材開発を行い、効果を検証し、それに基づき「読み」に困難をかかえると予測される年長児むけの「言語指導プログラム」の開発を行った。次に、これを聴覚障害児向けの言語指導プログラムに発展させたプログラムを開発した。このプログラムは、海外で有効性が確認された発達性読み書き障害児向けの言語指導プログラムのコンセプトを基に、聴覚障害のある幼児向けの日本語の音韻意識の指導スキルを融合し、それに新たに開発した日本の特徴に適合した音韻の視覚化教材を編入した独自のものである。論文は、次の5章で構成されている。

第1章では、国内外の発達性読み書き障害に関する研究を、歴史や定義、その要因から測定、指導方法等を整理した。日本の早期支援、LDの困難性(読み書き障害)にかかる文字の位置づけを分析した結果、①日本では幼児の音韻意識の獲得及び語彙の獲得状況に関する基礎研究が少ない、②保育環境である保育者の言葉がけや言語環境の研究も少ない、③発達性読み書き障害研究や早期介入に関する研究は十分ではなく、就学前幼児向けの指導・支援方法の研究も数少ないという課題を挙げた。第2章では、第1章の課題①に対し、幼児の音韻意識及び語彙の獲得、文字認知に関する基礎研究を行い、課題②に対し、調査対象クラスの結果を比較し、保育者の言葉がけや言語環境との関連性を分析した。さらに言語力テストを用い、認知能力が低くないにもかかわらず音韻意識の獲得や文字認知がすすまない幼児の存在を確認した。第3章では、課題③を解決するために、幼児への早期介入プログラムの開発に関する予備的な研究を行った。有効性が高いとされたHatcher(2006)のR+Pプログラムのコンセプトに、日本の聴覚障害児教育のスキルを融合し、聴覚障害児教育のスキルを活かす新たな視覚化教材「音韻シート」を作成し、プログラムに組み込んだ。第4章では、言語力テストによって発達性読み書き障害が疑われる幼児3名に対し、言語指導プログラムを試用し効果を検証し、遊びを通じた音韻分解課題や、文字提示や文字活用、文字と発音を結び付ける指導により文字認知が促進されるという結果を報告した。第5章では、これらの知見を活かし日本語の発達性読み書き障害幼児の効果的な指導・支援方法を確立するとともに、アプローチカリキュラムの構成を提案した。

この論文は、理論、実践、検証、考察等が精緻に記述され、データや資料も添付されており、反証可能なものであり、先駆的である。また、研究者、教育者、保育者等に示唆を与えるものであり、教育への寄与も大きい。よって、本教科開発学専攻の学位論文に値するものである。

以上の諸点から審査した結果、博士(教育学)の学位を授与するにふさわしい内容であると認める。

(課程博士・様式11)

最終試験の結果の要旨及び審査委員 報告書

学籍番号	212D001	氏名	大島 光代
論文題目	発達障害幼児の音韻意識及び語彙の獲得を目的とした言語指導プログラムの開発に関する研究		
論文審査結果	合		
最終試験結果	合		
最終試験 審査委員	審査委員長 村越 真 委員 古田真司 委員 野地恒有 委員 石川恭 委員 稲葉みどり		

(最終試験の結果の要旨、1,000字程度)

最終試験は、研究内容の発表と、その後の約1時間の質疑応答によって行われた。発表では、論文の概要、論文の各章の内容について説明がなされた。また、研究で開発したプログラムのデモンストレーション、実験映像、指導風景等が紹介され、この研究が確かな実践、データ収集、検証、考察に基づくものであることが示された。

質疑応答では、以下の点が指摘された。1) 研究の独創性、独自性はどのような点か。2) 研究から導き出された結果は、どこまで一般化でき、どこまで教育に応用可能なのか。3) 本研究の成果がより広汎な学術領域にどのような貢献・示唆をなしうるか、4) 未解決の問題、今後の研究の発展性等はあるか、5) 開発したプログラムの効果を保証する定量的条件や対象児の特性はどのようなものか。

いずれの質問に対しても、豊富な実践経験も交えながら的確に回答することができ、自身の研究内容について深く理解していると評価できた。

以上の点と、別紙の「審査概評」に述べたことを合わせて、最終試験の結果は「合」と判断した。

審査委員長

村越 真 